

MUSASHINO^{Vol.85} *for* TOMORROW



● 巻頭 ●
老演出家のオペラ談義

● 海外音楽事情 ●
ケンブ先生の思い出

● 卒業生インタビュー ●
バソーンに焦れて

April 2008
vol.85

平成20年度を迎えて

武蔵野音楽大学学長
附属高等学校校長

福井 直敬



厳しかった冬が去り、例年と変わることなく、キャンパスの自然は春の装いに彩られています。今年もまた、武蔵野音楽大学、同附属高等学校では、全国から多くの有為な新入生諸君を迎え、明るい雰囲気の中に平成20年度の学事を開始できますことは、私たち関係者一同にとり何よりの喜びであります。

しかし、ひとたび目を外に転じますと、経済の停滞、環境やエネルギーの問題、少子高齢化とともに医療や年金の問題、食の安全や治安などが社会問題として、連日大きく報道されています。

これらを目の当たりにし、端的ではありますが改定教育基本法に示されているところの「高い教養」と「専門的能力を培う」ために、我々は今何ができるかを真摯に考えなければならないと、新

学年を迎えるにあたり、改めて思い起こしております。

武蔵野では教育研究内容の向上を目ざして、近年、「博士後期課程」の設置や新学科の開設など、諸々の改革を積極的に進めてきました。

この博士課程からは、昨年、初めての「博士」を世に送り、本年も再びそれに続く、満足できる結果を期待しているところであります。また、新たに開設した「ヴィルトゥオーソ学科」および「音楽環境運営学科」につきましては、未だ完成年度に至っておりませんが、これら学科の特色を十分に発揮する学習成果を挙げつつあるものと確信し、数年後の卒業生の誕生を心待ちにしております。

武蔵野の教育方針は、「音楽芸術の研鑽」と「人間形成」であります。学園創立者福井直秋は“芸術の深さはこれを生み出すものの人間性に

影響されることは、今さら言うまでもない。この人間性が裏付けされるのは、多くは一般教育であることを考えれば、音楽をするものが一般教育をいかに重視すべきかは、自ずから明瞭となるであろう…”と述べております。ここでの一般教育を現行の教養教育と読み替えれば、これが武蔵野の「人間形成」教育の一つの重要な柱で、伝統でもあります。

新年度も、この教育方針に従って一層の努力を傾注してまいらる決意でありますので、皆さまの一層のご理解、ご鞭撻をお願い申し上げます。



▲武蔵野音楽学園、春の入間キャンパス

老演出家のオペラ談義

栗山昌良 ●オペラ演出家●

長年のオペラ演出を中心とする数々の音楽界への功績により、2006年に文化功労者に選出された栗山昌良さん。'52年の初演出から、半世紀以上にわたってオペラにかかわってこられたその人生は、まさに日本のオペラの歩みそのものと言えるでしょう。そんな栗山さんに、ご自身の音楽との関わりや、戦中から戦後、そして今にいたる日本オペラ界の事情についての興味深いお話をつづっていただきました。

3回目の「黒船」演出

私は、1926年生まれ、今年82歳です。この頃は、「私は20世紀の人間です。21世紀は分かりません」と

しらを切っています。この言葉の意味は理解していただけるでしょうか。

私がオペラの演出を始めたのは'52年ですから、今年で56年になります。今年の2月新国立劇場で、山田耕筰(1886～1965)のオペラ「黒船」の演出をしました。「黒船」の演出は80年代、90年代にもしたので今回で3回目になります。新聞に「老演出家3回目の挑戦」と書かれてしまいました。でも事実ですから仕方ありません。

山田耕筰の名は皆さんは、もちろんご存じですよ。ね。「からたちの花」など名曲の数々をたくさん作曲した作曲家です。その山田耕筰が、20世紀のはじめヨーロッパに留学した時、「日本人にヨーロッパ音楽を馴染ませるには、室内楽や交響曲よりもオペラが一番よいと思う。なぜな



▲武蔵野音楽学園入間キャンパス



▲今春上演されて好評の栗山先生演出「黒船——夜明け」。撮影：三枝近志／提供：新国立劇場

栗山昌良

(Masayoshi Kuriyama)

1926年生れ。50年俳優座演劇研究員となる。'52年メノッティの「アマールと夜の訪問者」(日本初演)でオペラ演出家としてデビュー。以後半世紀余にわたって、俳優、オペラ歌手の養成、オペラ・演劇の演出に当たる。特に文化庁のオペラ研修所においては、その開設時から指導に当たるとともに、團伊玖磨氏の後を受けて所長も務める。

オペラ演出家として、モーツァルトから現代、さらに我が国のオペラまで数々のオペラの演出を手がけ、優れた成果を収め、それらの功績によって87年紫綬褒章、96年勲四等旭日小綬章を受け、さらに2006年には文化功労者に選ばれた。

老演出家の オペラ談義

Masayoshi Horigama



▲入間キャンパス

ら日本は歌舞伎という伝統の舞台芸術を生んだ国なのだから”と考えました。でもその頃の日本は、オーケストラもオペラ歌手もオペラを作るのに必要なものはほとんどありませんでした。また国民もオペラを全く知りませんでした。ですから山田耕筈は、孤軍奮闘、オーケストラを作り、歌手を養成し、大変な借金をして、日本のオペラに生涯の多くを捧げました。山田耕筈は、優れた数多くの日本歌曲の作曲家であることはもちろんですが、オーケストラを組織し(NHK交響楽団もルーツは山田耕筈から始まりました)、シンフォニー、オペラを作曲し、その他あらゆるジャンルの音楽を開拓しました。まさに超人です。

山田耕筈は、マーラー、R.シュトラウス等多くの名匠に学びました。その意欲の結晶がオペラ「黒船」に結集されました。日本のグランドオペラの第1号と言ってよいでしょう。

夢の結晶、新国立劇場

1997年に開場した新国立劇場は、日本のオペラを作ってきた先人

たちの夢と理想の結晶です。

1945年、日本は戦争に敗れ、焦土の中から人々が立ち上がり始めた時、新しい劇場文化はオペラにあると、その時代の声楽家たちも夢と理想をもって立ち上がりました。藤原歌劇団を創設した藤原義江(名テノールです。女性ではありません)を始め、二期会を創った多くの音楽家たちの熱意が、昨年10周年を迎えた新国立劇場の建設に結集したのです。新国立劇場は、日本の声楽家の努力が国を動かして建てられたとあってよいのです。

その新国立劇場の4代目の芸術監督となった指揮者の若杉弘さんが、まず第一に選んだ演目が、日本のオペラの第一作といってよい山田耕筈のグランドオペラです。若杉さんは、日本のオペラ劇場だからきちんと正確に日本のオペラの歩を刻んで行こうと考えたのでした。「黒船」は、40年の初演から(初演時の題は「夜明け」でした)現在まで何回か上演されてきました。しかし、それらは、その折々の都合で多くのカットを余儀なくされてきました。新国立劇場において初めて完全な全曲上演が可能となったのです。作



▲武蔵野音楽大学オペラ公演「フィガロの結婚」(2006年)

曲され始めてから実に90年余が経っています。オペラ上演は、それ程大変なことなのです。作曲者、歌手、指揮者、オーケストラ、演出者、照明、装置、衣裳のデザイナー、それらを統括する舞台監督、そしてスタッフ、プロデューサーなどが劇場に結集して、初めてできるものなのです。このように一つの作品を上演するためには、信じられない程の多くの人たちが必要となるのです。



戦時中から戦後のオペラ事情

話を交えましょう。音楽学校でオペラが上演されたのは、東京音楽学校（現在の東京芸大）が創設された頃、同校の奏楽堂（上野公園に移築されています）での試みのような上演でした。その後、学校でのオペラの上演はできなくなっていきました。理由は日本の軍部の政治支配による政策です。当時の日本の音楽学校の主目的はヨーロッパ音楽の普及教育のためにあったので、音楽は一般学校教育の音楽教員養成課程の中で学びました。そして、その流れは昭和時代の軍国主義思潮の流れの中に時を重ねていきました。学生は、男女共、互いに友人として口をきくことは禁止されていました。軍事教練も男女共にありました。さらに“教師となる者が人前で化粧し、客に媚びを売るとは何ごとか”との教訓があり、オペラに出ようとする学生は退学をしなければなりません。学校の廊下を通る時などは、先生が来ると廊下の傍らに寄って立ち止まり、お辞儀をして先生の通り過ぎるのを待つ～それが学生のマナーだったのです。恋愛などということとはとんでもないことで、発覚したら退学となります。今から70年前の実際の話です。

世界のほとんどの国を敵にまわしてのあの戦争～第二次世界大戦。日本は、ヒトラー支配のナチス・ドイツ、ムッソリーニのイタリアと日独伊三国の防共協定を結んでいました。ですから、ドイツとイタリアの音楽は演奏できましたが、フランスやイギリス、アメリカの音楽は敵性音楽として演奏

することもレコードをかけることも禁じられていました（レコードって知っていますか？現在のCDの前身です）。一般の人々には、その音楽（洋楽と言っていました）が、敵の音楽か味方の音楽か分かりません。戦争中は、家の中でも音が外に漏れないように聴かなければならず、1曲聴くのに随分と苦勞したのです。音が外に漏れると“非国民！”と誰かが怒鳴り声をあげ、窓ガラスに石が飛んでくるようなことがありました。

そんな時代でしたが、先ほど記した日独伊防共協定のお陰でドイツとイタリアの音楽は演奏できるので、クラシック音楽界は細々ながら演奏を続けることができました。N響は当時日本交響楽団とっていましたが、日比谷公会堂を演奏会場として曲がりなりにも定期公演を続けていました。マーラーの“大地の歌”の日本初演は、'41年でした。モーツァルトの“フィガロの結婚”も演奏会形式ながら初演されたのは同年だったと記憶しています。

その頃の演奏会の様子を記しておきましょう。

当時は、“国民儀礼”というものが、演奏開始前、



▲江古田キャンパス



▲吉原すみれ教授のレッスン



▲入間キャンパス（本学附属高校）

老演出家の オペラ談義

Masagoski Horigama

5

舞台上に軍服を着た楽団長が現れ、「起立」と号令をかけます。すると客席にいる我々は全員起立し、「皇居遙拝」との号令で皇居に向かって遙拝します。さらに号令の言葉は忘れましたが戦地にいる兵士たちへの感謝と武運を祈る一礼があり、着席となります。そして、やっと演奏が始まるという具合でした。指揮者も演奏者も客席にいる我々も、男性は全員国民服という軍服に近いカーキ色の服と帽子、女性は音楽会などに来たら怒鳴られるので、会場にはほとんど居ませんでした。～理由はお分かりですよ。

オペラは、歌舞伎座での藤原歌劇団の公演です。'41年には「アイダ」、'42年には「ファウスト」、「ローエングリン」、'43年には「セヴィリアの理髪師」、「フィデリオ」と私は中学生ながら毎公演観ていました。「フィデリオ」の時でした。7円90銭のチケット代が10銭足らず、まけて貰った思い出があります。

戦争が終わりました。しかし歌舞伎座も焼け落ちてしまっています。そこでオペラは、帝国劇場（現在の建物ではありません。明治末期に建てられたヨーロッパのオペラ劇場を模した素晴らしい建物でした）で公演

をするようになります。それは進駐してきたアメリカ軍による指導もあり、また歌舞伎などは封建的な忠君愛国をテーマとすることから公演がほとんどできなくなってしまったことも手伝って、オペラの公演には大勢の人が集まるようになっていったのです。また、当時は日本側も欧米に学べ！民主主義だ！と何もかも日本のものは駄目、欧米のものはよし！とする風潮になったのです（変わり身の早いのは日本人の特徴のひとつかな？）。

帝国劇場がオペラハウスとなり、藤原歌劇団が「46年「椿姫」、「カルメン」、「カヴァレリア・ルスティカーナ」、「パリアッチ」、「蝶々夫人」、「ラ・ボエーム」、「タンホイザー」、「魔弾の射手」と次々と公演を行いました（この頃、バレエ団も結成されていきました）。オペラの一つの演目が昼夜2回公演で、みな8回から10回の公演でした。一方アメリカ軍は、東京劇場（築地の現在の場所ですが建物は違います）、アニーパイル劇場（東宝劇場）を日本人オフリミットで、「ミカド」や「蝶々夫人」等を上演させて兵隊たちが楽しんでいました。まさに華々しいオペラの時代が到来したかの如くの様相を呈しました。この現象はしばらく続きました。



日本オペラの揺籃期

オペラの話が続けます。日本のオペラ史の中で、何と言っても画期的なのは、'56年のNHKが招いたイタリアオペラ団の公演です。合唱と小さな役、そしてオーケストラは日本人でしたが、その来日した歌手たちの本場の声と演出には圧倒されました。その頃、私はオペラ演出に手を染めていたので、NHKから日本側の演出助手に招かれ、オペラ



▲武蔵野音楽大学オペラ公演「カヴァレリア・ルスティカーナ」

の仲間であった、装置の妹尾河童、衣裳の緒方規矩子や現・チャイコフスキー記念東京バレエ団の総帥佐々木忠次、そしてN響の指揮研究員であった外山雄三、岩城宏之、作曲家の林 光等とともに本場のオペラ制作に初めて加わりました。

今から思うと、装置も衣裳も照明も簡便なものでしたが、あの頃は驚きの連続でした。我々はオペラ作りのイロハを学んだのでした。

さらにもう一つ日本のオペラに多大な影響を与えてくれたのは、'62年に日生劇場開場公演を飾ったベルリン・ドイツ・オペラの舞台でした。あの公演ほどカルチャーショックを受けたものはありません。オペラ演出の根源を見た思いでした。そしてオペラ歌手の舞台人としての存在感。この公演に洗礼を受けて、オペラ演出家 鈴木敬介さんが生まれたと言ってよいでしょう。

日本のオペラの大きな流れは、明治時代、教員養成を主目的とした音楽取調掛(現在の東京芸大)に始まり、帝国劇場、浅草オペラ、昭和時代になって藤原歌劇団、そして終戦の後結成された二期会、さらに新国立劇場の誕生と続きます。これらの

仕事は、ほとんど時代の声楽家たちの熱意あつての事象でした。そして音楽大学もオペラの存在を主眼とする教育に変貌を遂げてきました。武蔵野音楽大学の江古田キャンパスのベートーヴェンホールは、音楽教育には欠くことのできない重要な施設として、いち早く建てられたものと思います。私も、'62年武蔵野に招かれた老練な指揮者H.ヘルナー先生とともに、マスカーニの「カヴァレリア・ルステカーナ」などの演出を担当させていただきました。以来、武蔵野出身の多くのオペラ歌手が、日本のオペラ界で活躍して今日に及んでいます。また、今でも我が国の大きな存在として知る人ぞ知るA.ボルヒャルト先生のカール・オルフ「賢い女」を日本の昔噺に置き換えての新鮮な舞台は、ベートーヴェンホールの存在あってこそその鮮烈な舞台でした。

クラシック音楽、中でもオペラは劇場あつての芸術です。歌うこと自体、劇場空間によってその意義を生みます。優れたオペラは、劇場を熟知した作曲家によって創られました。

皆さん、音楽の勉強、音楽を知り学ぶのは、教室の中だけではありません。劇場を知ることには意を用いる



▲江古田キャンパス ベートーヴェンホール

音楽余話 細君が彫像に化けて、現場をおさえる

曲名としては、「軽騎兵序曲」というのでよく知られていたが、これを書いたのはフランチェスコ・スッペ＝デメリである。

19世紀の後半時代に、いわゆるオペレッタが流行って、スッペは、それを211作品も作って、一躍、ドイツ、オーストリアでの、その分野での寵児となった。

ところでオペレッタというのは、主人公が、バルカン半島の、どこかの国の皇太子で、若いし、金には困らないので、思うままにパリを遊び

回っていたという設定になっている。

ハンガリーのある街の市長さんが、そんな皇太子の真似をして、ある農民の娘を、なにかうまいことをいって誘惑し、彫像の前のベンチのところならいいだろうと思って口説きはじめ、あと一歩というところまで漕ぎ着けた。

ところが、その市長さんが「アッ!」と思い、目をしばたいて、もう1回見つめなおした。

だが、彫像は静止したままであった。

彼には、その彫像が、ちょっと動いたように感じられたのである。

でも、そんなことのあるはずがない。ヤレ、ヤレ、錯覚だったか、と市長さんが安堵の胸を撫で下ろしたところへ、

「あなた! なんという破廉恥なことを」と声がかかった。聞き馴れたアポロニア夫人の声である。彼女は彫像に偽装して、とうから、そこに立っていたのである。

千蔵八郎

海外音楽事情

ケンプ先生の思い出 ②

ジョン・ダムガード教授(ピアノ)



昨年10月から12月まで、武蔵野音楽大学の客員教授として3度目の来学を果たされたジョン・ダムガード教授。同じく本学の客員教授であったゲオルク・ヴァシャヘーリ先生の思い出を伺った前回につづき、今回は同様に親交のあったウィルヘルム・ケンプ先生にまつわるエピソードを披露していただきました。

ベートーヴェンを学ぶ意義

ミュンヘンに住んでいたウィルヘルム・ケンプと、私はロンドンで出会い、イタリアのポジターノに招かれた。彼は毎夏二週間、自ら選んだ若いピアニストたちを招き、ベートーヴェンの32曲のピアノ・ソナタと5曲のピアノ協奏曲を学ぶ集いを開いていたのである。一年のうち、その時期を除いては、彼は演奏旅行に忙しく、指導をしたがらなかった。彼はベートーヴェンを注意深く学ぶことにより、最良の音楽的基礎を身につけることができると確信していた。なぜなら、ベートーヴェンは解釈について、また実際の弾き方について、細心の指示を書き記しているからである。バッハも、モーツァルトも、シューベルトも、こ

のような書き方はしなかった。ケンプは、シューベルトについては、「それを受け止める素地があるかどうかだ。教えたり学んだり出来るものではない」と言って、教えようとしなかった。

ポジターノには通常、誰もが一回招かれるだけであったが、ケンプは私を毎年のように招いてくれ、またコペンハーゲンに来た時にも、時折、私の演奏を聴いてくれた。彼の「指導」は、ありきたりの指導ではなかった。誰かの演奏を聴いた後、彼自身がピアノに向かって座り、その曲を弾きながら、随時中断しては、生徒に話しかけるのである。その話はいつも文化全般にわたり、多くの場合、ドイツの文化やギリシヤ・ローマの古典にまで及んだ。

ポジターノでの日々

ポジターノの集いは実にユニークだった。二週間をケンプと共に過ごす、という事は信じがたいほどの恵みであった。音楽的な内容だけではない。ここでは、素晴らしい人々との出会いもあった。ワーグナーの孫娘、フェオドール・シャリアピンの娘(エッフェル塔のように背が高く、父親そっくりの低い声だった)、



▲ダムガード先生とケンプ先生(右)

などなど。ある時、ケンプは我々をポジターノから近くの島まで船旅に連れ出してくれたのだが、その島は彼の友人レオニード・ミヤシン(ディアギレフの生徒で世界的に有名な振付師)の所有地であった。

ポジターノでの全ては、ケンプから若いピアニストたちへの個人的な贈り物であり、誰もそこに入り込んで邪魔をすることは許されなかった。私は、ある時、新しい才能を見出そうとはるばるニューヨークからポジターノまでやって来たアメリカの興行主がいたのを覚えている。彼女は、ある朝、テラスにケンプを訪ね、その日の講習を聴かせてほしいと懸命に願い出たのであるが、ケンプはそれが自分と若いピアニストたちとのプライベートな集いであると言って、頑として譲らず、彼女はたった一杯のレモンジュースをふるまわれた後、ついにピアノは一音



たりとも聴かずにニューヨークへ帰らねばならなかった。

ある日、このポジターノで、私は武蔵野音楽大学の前学長 故・福井直弘氏より、日本への招聘の手紙を受け取った。私を福井学長に紹介したのが、ケンプ氏であったのか、ヴァン・デル・ヴェーリ氏であったのか、未だに分らない。いずれにしても、私はその後、素晴らしい二年間を武蔵野音楽大学で過ごすこととなった。そして今また、この地に戻り、感慨もひとしおである。

(訳:重松万里子)

ジョン・ダムガード (John Damgaard)

デンマークのピアニスト。ニューヨークのイーストマン音楽学校で学ぶ。さらにゲオルク・ヴァン・デル・ヴェーリ、イロナ・カボシュ、ウィルヘルム・ケンプのもとで研鑽を積む。デンマーク王立音楽院で後進の指導に当たり、武蔵野音楽大学で1979年から'81年まで客員教授を務めた後、'84年からはオーフス王立音楽アカデミーの教授に就任。世界各国でも古典派とロマン派、およびデンマークのピアノ音楽を含む作品のコンサートを行う他、多くの国際コンクールで審査員を務めている。昨年10月から3ヵ月、本学客員教授として着任。



音楽の万華鏡④

16世紀前半にマルティン・ルターが宗教改革を起こしたことを受けて、世紀中頃にはカトリック側に立つ南ドイツの宮廷の中に対抗宗教改革の機運が広がった。たとえば、ミュンヘンのバイエルン公アルブレヒト5世(在位1550-1579)はカトリック教会(イエズス会)に改革を行なわせたが、一方美術や音楽の育成、図書の収集などの文化面には費用を惜しまなかった。そのため1557年初夏には9名の宮廷顧問官から、音楽家たち、特に宮廷楽長オルランドゥス・ラッス(1532-1594)への高額の出費と目に余るほど多い飲食や宴会を批判した意見書を受け取ることになる。そこでアルブレヒト5世は、旧約聖書の詩編から罪の意

詩編曲集に描かれた 宮廷での奏楽

識と懺悔への願いが力強く表現された悔悛詩編全7編を自ら選んでラッスに作曲を依頼、悔悛詩編モテット曲集が生まれた。フランドル楽派の最後の巨匠ラッスが歌詞の内容を音楽で解釈した全8曲の連作詩編として1559年に完成した曲集は、秘曲とされて出版が控えられ、一流の金細工師、画家、写譜者、装丁家が加わり1570年までかけて羊皮紙を使った豪華な写本(楽譜が2巻と注釈が2巻)に仕上げられた(現在、ミュンヘンのバイエルン州立図書館所蔵)。ミュンヘンの宮廷画家ハンス・ミーリヒ(1516-1572)は写本の全頁にわたる詩編の内容を解釈した豪華な挿絵ばかりではなく、各巻の最初と最後に大判の挿絵を描い

た。特に、楽譜第2巻の最後の数葉には、バイエルン宮廷楽団の奏楽風景が見られる。この最後の絵は、ミュンヘンのレジデンツ(王宮)2階の「聖ゲオルクの騎士の間」での演奏の様子を示しており、当時の演奏実践を知る手掛かりとなる。歌手と楽器奏者が混ざっているのは当時の典型的な編成であり、リコーダーやトランペットなど5種の管楽器が3種の弦楽器と共に使われている。中央のスピネットにはラッス自身がおり、その隣にはソプラノ・パートを歌う3人の少年聖歌隊員が見られる。この豪華な写本は、宮廷顧問官からの意見書に対する機知に富んだ返答と言える。

寺本まり子

卒業生インタビュー

小山 清さん(バスン奏者)

バスンに焦れて



小山 清 Kiyoshi Koyama

1946年生れ。埼玉県出身。1965年川越工業高等学校卒、武蔵野音楽大学入学。1969年武蔵野音楽大学卒、フランス政府給費留学生として国立バリ音楽院に入学、バスンをモーリス・アラール氏、室内楽をピエール・ピエルロ氏に師事。バスン並びに室内楽のブルミエプリを獲得。1973年イ・ソリスト・ヴェネチ(ヴェネチア室内合奏団)にソリストとして入団。1978年ハノーバーに於いてK.トゥーネマン氏にファゴットを師事。1980年帰国後、日本フィルハーモニー交響楽団に入団。1995年日本バスンの会設立。2006年シンフォニエッタ静岡「バスン・スーパーソリスト」に就任。

ご存知「のだめカンタービレ」で一躍注目を浴びたバスン。そのバスンの専門家で日本バスンの会会長が、武蔵野音楽大学の卒業生である小山 清さん。バスンへの想い、音への愛情を語っていただきました。

山畑先生との出会い

甲子園に行きたくて川越工業高校へ入り、1年生の時、突然の出来事で野球ができなくなり、吹奏楽部に入りクラリネットを吹いたという。そのクラリネットも歯並びが悪く苦痛、武蔵野受験は直前にフルートに変更。

小山 実技試験の後、試験官の先生から「君は何年フルートをやりますか」と聞かれて3ヵ月ですと答え爆笑されました。入学後その先生から「君はケンカが強そうだからファゴットをやりなさい」と意味不明な指示をいただいて、名前も知らなかった楽器を始めることになったのです。

この先生が元N響の名ファゴット奏者の山畑馨先生。以後の小山さんの人生を決めた方である。

小山 新入生歓迎コンパで「悔い多き青春時代を過ごしなさい」といわれ、青春時代だけでなく、現在に至るまで悔いの多い人生を日々過ごしていますが、この時から人間山畑馨の世界にどっぷりと浸かりました。先生はおっしゃるのです「私は、武蔵

野音楽大学ファゴット村、山畑純才教室という看板を掲げ、それに誇りを持って教育している。どんな純才も磨けば輝くこともある。だから君たち頑張る努力しなさい」私はこの言葉を糧に一生懸命勉強しました。朝大学の門が開いて、夜閉まるまで練習したものです。

アラール先生との出会い

しかし、正直なところ決してファゴットが嫌いではないが、心にフィットしない違和感のようなものを感じていた。大学1年の秋、ファゴットにはバスンというフランス式の楽器があり、モーリス・アラールという素晴らしい名人がいることを知り、そのレコードを聴いてすっかり魅了される。そしてバスン人生が始まる。

小山 バスンの歌心溢れる豊かな表現力と、素晴らしく魅力的な音色に魅せられてしまいました。ファゴットは他の楽器とあわせやすい、オーケストラにいて居心地のいい楽器。一方バスンはキーの数も少なく、バロック時代から大きな変化はない。音色や音程などコントロールが難しい反面、鮮明で多彩な響きがあり、高音が美しくソリストックで豊かな表現力があります。2つの楽器はそれぞれドイツとフランスの文化を象徴するような味わいがあり、文化の差を感じます。私にとっ



▲恩師山畑先生

てバスンは自分を表現できる楽器、しゃべりたいことをしゃべらせてくれる楽器なのです。

だが、バスン人生も一直線ではない。友人からは、バスンのメーカー、クランボン社の名前に引っかけて、ナランボン、イランボンと冷やかされる始末。転機はフランス政府給費留学試験に合格したこと。パリ音楽院であこがれのアラール先生のレッスンを受けることになる。フランス人達の高度な演奏技術や繊細な表現力に驚き、毎日10時間も12時間もの練習をしたという。

小山 来る日も来る日も敗北感に打ちひしがれ、夜9時まで必死に練習。カフェの止まり木で水より安い、殆ど酔のようなワインを舐め、酔っぱらっては宿へ帰る。途中、橋の上で、もし今バスンを持っていたら、川に投げ捨てるだろう、と思うこともありました。ただ、努力することだけはやめなかったし、音楽が好きでした。

音楽との 出会い

1969年のパリ留学から、1973年のイ・ソリスト・ヴェネチア室内合奏団(ヴェネチア室内合奏団)にソリストとして入団。1978年ハノーバーでファゴットを学び、1980年帰国して日本フィルハーモニー交響楽団に入団する。

小山 音楽家は基本的に誠実な人達だと思う、この中にいられるのは幸せです。たった1回の人生を、好きなことをやろうと続けてきたわけですが、今でも自分はヘタだと思っています。勢いだけでやってきて、58歳になった頃、やっと少し吹けるかなという感じです。

音楽をやられる方は、皆エリートです、皆上手。才能もあります。ただ技術だけではないのが音楽です。音に対する愛と夢が必要です。音

楽は、それぞれの地域の文化、歴史、気候風土、美術、文学、宗教などを秘めた宝の山です。こうした豊かな世界のなかで、音楽の背後、譜面の裏側にあるものを感じながら模索するのはとても楽しい。

例えばイタリアで、ヴィヴァルディの四季の独特な演奏を聴く。とても不思議な印象を受ける。ある日ヴェニスサンマルコ広場のカフェに座っていると、以前聴いたその音が、その場の空気感じられて「あっ!」と思う。

「君、けんか強いかね…?」で始まり、武蔵野音大の自由で明るい学園生活に支えられながら、バスンを続けてこられて感謝です。音楽の不思議、豊かさ、汲めども尽きせぬ味わい深さを噛み締めながら、これからも楽しんでいきたいものです。

インタビューの後、小山さんから次のようなメールをいただきました。

『最近ずっと本日持参した新しい楽器を吹いていました。ところが今日、ご要望にこたえてちょっと音を出してみ、自分のバスンの音ではないことに気が付きました。家に帰り古い楽器を引っ張り出して吹いてみて、自分の音がしたので安心しました』

(平成20年2月7日インタビュー、
文責編集部)



▲バスンを持つ小山さん



▲パリ音楽院での記念写真。右端小山さん、前列左がアラール先生(1970年)

MUSASHINO NEWS

第14回インターナショナル・サマースクール・イン・トウキョウ



A. v. アルニム



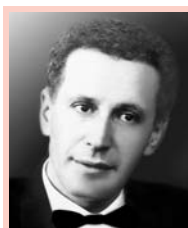
J. ヤンドー



E. クズネツォフ



A. ナセトキン



A. セメツキー



N. トゥルーリ



U. ヘルシャー



F. レングリ



S. シェリエ



松本 美和子



S. シヤシュ



堀内 康雄

今年、第14回を迎える「武蔵野音楽大学インターナショナル・サマースクールイン・トウキョウ」が下記のような豪華教授陣を揃えて開催されます。

このサマースクールは、音楽の専門的な教育を受け、プロの音楽家や音楽教育に携わることを目指す人たちに、専攻実技を磨く絶好の場を提供するものです。

●開講期間・会場

平成20年7月19日(土)～29日(木)

武蔵野音楽大学・江古田キャンパス

●開設講座及び講師

ピアノ=A. v. アルニム、J. ヤンドー

E. クズネツォフ、A. ナセトキン

A. セメツキー、N. トゥルーリ

ピアノ・デュオ=E. クズネツォフ

ヴァイオリン=U. ヘルシャー
フルート=F. レングリ、S. シェリエ
声楽=松本美和子、S. シヤシュ、堀内康雄

●募集人数・応募資格

1講座につき10～12名
専門的教育を受けている方。国籍不問
ただし声楽は20歳から50歳まで

●受講時間

ピアノ、ピアノ・デュオ、ヴァイオリン＝
1回90分で3回

フルート、声楽＝1回60分で4回
(講師により当該時間を変則的に組替える場合があります)

●受講料

1人120,000円、ピアノ・デュオは1人
70,000円

(個人レッスン料、通訳料、指導法講座入
場料、ピアノ音楽セミナー入場料、演奏会
入場料、懇談会費等を含む)

●演奏会等

ピアノ、ヴァイオリン、フルート、声楽の講師
によるリサイタル、公開レッスン、ピアノ音楽
セミナー

●お問い合わせ・要項請求

武蔵野音楽大学演奏部
TEL.03-3992-1120へ募集要項をご請求
ください(要項は無料、送料は本学が
負担します)。

*講師の病気、その他やむを得ない事情に
より、一部内容を変更する場合があります
ので、予めご了承ください。

11

着任外国人教授紹介 (平成20年度前期)

ケマル・ゲキチ

(ピアノ/クロアチア)

Kemal Gekić



1962年クロアチア生まれ。旧ユーゴのノヴィサッド音楽院で学ぶ。史上最高得点でディプロマを取得、直ちにピアノ科の教員に採用された。1981年国際リスト音楽コンクール第2位他、受賞多数。1985年のショパン国際コンクールでは、聴衆の圧倒的支持を得て名誉賞受賞。その後世界各地で活発な演奏活動を展開し、特にリストの第一人者として不動の地位を築いている。フロリダ国際大学教授。

レイ・E.クレマー

(ウィンドアンサンブル指揮 / アメリカ)

Ray E. Cramer



アメリカで最も優れた音楽学部として評価されているインディアナ大学で、2005年まで吹奏楽学科主任教授並びにバンドディレクターとして活躍し、また世界的に権威のあるミッドウェスト・クリニック会長の要職にもある。これまでも全米吹奏楽指導者協会会長をはじめ数多くの吹奏楽協会の要職を歴任している他、インディアナ大学最優秀教授賞、Phi Beta Mu 国際優秀賞等多くの賞を受賞。全米で客員指揮者、指導者、審査員として活躍している。

ヨハン＝ゲオルク・シャルシュミット

(オペラ/ドイツ)

Johann-Georg Schaarschmidt



フライブルクとダルムシュタットで研鑽を積み、ダルムシュタット国立歌劇場にて演出を担当。ベルリンのドイツ歌劇場にてW.ワグナー、エヴァーディングらの演出助手を務めた他、ヨーロッパ各地の歌劇場及び日本で演出家として活躍。ハンブルク音楽大学オペラ科教授、フライブルク音楽大学オペラ科主任教授を歴任しフライブルク音楽大学学長の要職にあった。

武蔵野音楽大学チェンバーオーケストラ誕生

かねてから結成が待たれていた“武蔵野音楽大学チェンバーオーケストラ”が、いよいよ本年4月からスタートすることになりました。

メンバーは、若手卒業生および在学生約20名で、指導・監修はドイツから客員教授として長期就任中の、クルト・グントナー教授が担当します。

グントナー教授は、23歳でバイエルン国立歌劇場管弦楽団のコンサートマスターとなり、その後ミュンヘンフィル、バイロイト祝祭管弦楽団のコンサートマスターを歴任。1963年から2000年まで、アンスバッハのバッハ週間のコンサートマスターおよびソリストも務めるなど、国際的なヴァイオリニストとして活発に活動を展開しました。一方、30年間にわたりオデオン・トリオのメンバーとして華々しく活躍し、ドイツの作曲家を中心に多数の作品を録音する他、著名なヘンレ社の楽譜校訂者でも

あります。教育活動としては、1976年から2004年まで約30年にわたりミュンヘン音大の教授を務め、その間、多くの逸材を世に送り出しました。2005年から武蔵野音楽大学に就任、ヴァイオリンと室内楽を担当しています。

チェンバーオーケストラのデビューコンサートは、7月1日を予定していますが、同教授の卓越した手腕によって磨かれるアンサンブルに、大きな期待が寄せられています。



福井直秋奨学金 第4種に柄本さん決定



武蔵野音楽大学および同附属高等学校には、独自の奨学金として創立者を記念した、「福井直秋記念奨学金」の制度があります。

これは、人物、学業ともにすぐれ向学心溢れる学生、生徒に給付するもので、高等学校および大学(学部1年生から大学院まで)の第1種(優秀な学生)、第2種(特待生)、第3種(留学生)、第4種があります。平成18年度は、計86名、平成19年

度は、計82名に給付されました。この奨学金には、返還義務がありません。

第4種奨学金は平成18年度に新設されたもので、在学中音楽的、学術的、また社会的に特に顕著な業績を上げた学生に30万円を給付しますが、このたび平成19年度の奨学生に、大学院修士課程1年(受賞時)の柄本舞衣子さんが選ばれました。昨年、第7回USA国際ハーブコンクール(アメリカ)第5位、第2回国際ハーブコンクール(フランス)第2位にそれぞれ入賞した成果を認められたものです。

表紙の顔



永岡 信幸さん

東京都出身。1978年武蔵野音楽大学入学、クロイツァー賞を得て同大学院修了後、リスト音楽院、ベルリン芸術大学、パリに留学。'88年ベルリン芸大を全教授一致の最優秀で卒業しました。坂井玲子、P.シヨイモシュ、K.ヘルヴィヒ、G.ムニエの各氏に師事。

'85年ヴィオッティ国際音楽コンクールピアノ部門第3位、'86年ブゾーニ国際ピアノコンクール第4位(1位なし)、マリア・カナルス国際音楽コンクールピアノ部門第3位等、数々の国際コンクールで入賞しています。'85年リスト音楽院にて初リサイタル、'89年サントリーホールにて日本デビューを果たし、以来バロックから現代曲まで幅広いレパートリーで、国内はもとよりヨーロッパ各地でリサイタル、協奏曲のソリスト、室内楽に出演。また、音楽月刊誌執筆、公開講座、ピアノコンクール審査員等、活発な活動を続けています。指導者としても定評があり、現在、武蔵野音楽大学、白鷺大学足利高校音楽科、都立芸術高校にて後進の指導にあたっています。

【今後の音楽活動】

- 6月24日 東京文化会館にてリサイタル
- CD【ナミ・レコード】
 - ・リスト：巡礼の年 第1年「スイス」全9曲／リスト：歌劇「ノルマ」(ベッリーニ)の回想
 - ・ベートーヴェン：ピアノソナタ作品106「ハンマークラヴィア」／作品110(6月にリリース予定)

平成20年度4月～7月公開講座・演奏会のお知らせ

公開講座

ディートマル・キューブルベック トロンボーン・クリニック&ミニ・コンサート

4月19日 17:00 90室(江古田) ¥1,000<全席自由>

オイスティン・バーズヴィック テューバ・クリニック&ミニ・コンサート

4月26日 17:00 モーツァルトホール(江古田) ¥1,000<全席自由>

セルゲイ・エーデルマン ピアノ・リサイタル

5月13日 18:30 ベートーヴェンホール(江古田) ¥1,000<全席自由>

ミハウ・ソブコヴィアク ピアノ・リサイタル

5月22日 18:00 バッハザール(入間) ¥1,000<全席自由>

クルト・グントナー・トリオ演奏会

6月2日 18:30 ベートーヴェンホール(江古田) ¥1,000<全席自由>

Vn.クルト・グントナー Vc.クレメンス・ドル Pf.ドル・恵理子

ケマル・ゲキチ ピアノ公開レッスン

6月4日 18:30 モーツァルトホール(江古田) ¥1,000<全席自由>

向山佳絵子 チェロ・リサイタル

6月13日 18:30 ベートーヴェンホール(江古田) ¥1,000<全席自由>

演奏会

大学院修士課程在学学生によるコンサート①

4月21日 18:00 バッハザール(入間) 入場無料<全席自由>

大学院修士課程在学学生によるコンサート②

4月22日 18:00 バッハザール(入間) 入場無料<全席自由>

平成19年度大学卒業生による新人演奏会

5月12日 18:30 津田ホール ¥2,000<全席自由>

平成19年度大学院修士課程修了生による研究演奏会

6月11日 18:30 津田ホール ¥2,000<全席自由>

ニュー・ストリーム・コンサート

ヴィルトゥオーソ学科演奏会①

6月16日 19:00 シューベルトホール(パルナソス多摩) ¥1,000<全席自由>

ヴィルトゥオーソ学科演奏会②

6月25日 18:00 バッハザール(入間) ¥1,000<全席自由>

武蔵野音楽大学チェンバーオーケストラ

7月1日 18:30 ベートーヴェンホール(江古田) ¥1,000<全席自由>

武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブル演奏会

7月14日 18:30 岐阜県県民ふれあい会館サラマンカホール

指揮:レイ・E.クレマー

7月15日 18:30 三重県総合文化センター大ホール ¥1,500<全席自由>

7月16日 18:30 東京オペラシティ コンサートホール

A席¥2,000/B席¥1,500<全席指定>

武蔵野音楽大学インターナショナル・サマースクール・イン・トウキョウ

世界の名教授たちによるスペシャルコンサート

U.ヘルシャー(Vn.)&A.v.アルニム(Pf.) デュオ・リサイタル 7月22日 18:00 ベートーヴェンホール(江古田) ¥3,000<全席自由>

S.シェリエ&F.レングリ フルート・デュオ・リサイタル 7月23日 18:00 ベートーヴェンホール(江古田) ¥3,000<全席自由>

ピアノ音楽セミナー 講師:E.クズネツォフ 7月25日 18:00 モーツァルトホール(江古田) ¥1,000<全席自由>

声楽指導法講座 松本美和子公開レッスン 7月27日 18:00 モーツァルトホール(江古田) ¥1,000<全席自由>

お問い合わせ ●武蔵野音楽大学江古田キャンパス演奏部 TEL.03-3992-1120 ●武蔵野音楽大学入間キャンパス演奏部 TEL.04-2932-3108

*講師の病気、その他やむを得ない事情により、内容を変更する場合がありますので、あらかじめご了承ください。

平成20年度武蔵野音楽大学 武蔵野音楽大学附属高等学校学校説明会

本学では、音楽大学・高等学校音楽科に進学を希望している高校生、中学生、小学生とその指導者、保護者の方を対象にした、武蔵野音楽大学・同附属高等学校の説明会を、各地で開催しています。平成20年度は右記のとおり開催いたしますので、ぜひご参加ください。

日程	会場	申込締切
●5月18日①	帯広市「とちかちプラザ」	4月28日①
●5月25日①	高知市「高知県立県民文化ホール」	5月7日①
●6月1日①	盛岡市「プラザおでって」	5月13日①
●6月8日①	長崎市「長崎ブリックホール」	5月20日①
●6月15日①	高岡市「ウイングウイング高岡・高岡市生涯学習センター」	5月27日①
●6月22日①	「武蔵野音楽大学 江古田キャンパス」 ※大学をみの説明会となります	6月3日①
●6月29日①	「武蔵野音楽大学 入間キャンパス」	6月10日①
●11月9日①	「武蔵野音楽大学 入間キャンパス」	10月21日①
お申し込み・ お問い合わせ	武蔵野音楽学園広報企画室 TEL.03-3992-1125	

●編集後記●

巻頭を飾っていただきました栗山先生の「老演出家のオペラ談義」は、総合芸術たるオペラの発展と共に日本の音楽界が育まれてきたこと、その中でベートーヴェンホールをはじめとする劇場の重要性が訴えられています。新学期のスタートと共に、我々の過去を振り返ることも大切です(編)。

説明会の内容

- 10:00～16:00(予定) ●全体説明会(大学・高等学校別に行います)
- ミニ・コンサート ●受験相談(希望者のみ) ●ワンポイント・レッスン(希望者のみ)
- 参加無料(簡単な昼食を用意します)

MUSASHINO NEWS

栄冠おめでとう! (コンクール入賞者等)

(前号までの未掲載分、順不同、敬称略、経歴は受賞時のもの)

- 江田 千聖 (平成7年大学卒サクソフォン専攻 本高等学校卒) 2007年12月 イーストマン音楽院大学院 音楽研究科 器楽専攻 演奏博士号修了 (アメリカ)
- 千葉 優子 (昭和52年大学卒音楽学専攻 本大学院修士課程修了) 第23回 ヨゼフ・ロゲンドルフ賞受賞
- 伊藤 麻衣子 (平成18年大学卒ピアノ専攻 本高等学校卒 本大学院修士課程1年次在学) チェコ音楽コンクール2007 ピアノ部門 第2位入賞 ●飯島典子 (平成18年大学卒声楽専攻 本高等学校卒 本大学院修士課程2年次在学) 第17回 日本クラシック音楽コンクール 全国大会 声楽部門 大学院・研究科の部 第4位入賞 ●金子 周平 (大学3年次在学ピアノ専攻) 第17回 日本クラシック音楽コンクール 全国大会 ピアノ部門 大学の部 第5位入賞 (最高位)、チェコ音楽コンクール2007 ピアノ部門 入選 ●住谷 かさね (大学4年次在学打楽器専攻) 第17回 日本クラシック音楽コンクール 全国大会 打楽器部門 大学の部 第5位入賞 ●高橋 愛 (大学3年次在学フルート専攻) 第17回 日本クラシック音楽コンクール 全国大会 フルード部門 大学の部 第5位入賞 ●岡岡 優 (平成19年大学卒ピアノ専攻) 第17回 日本クラシック音楽コンクール 全国大会 ピアノ部門 一般の部 入選 ●松田 里加 (大学3年次在学フルート専攻) 第17回 日本クラシック音楽コンクール 全国大会 フルード部門 大学の部 入選 ●清水 多恵子 (平成18年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程2年次在学) 第17回 日本クラシック音楽コンクール 全国大会 声楽部門 大学院・研究科の部 入選 ●並木 和美 (平成18年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程2年次在学) 第17回 日本クラシック音楽コンクール 全国大会 声楽部門 大学院・研究科の部 入選 ●加藤 由貴 (大学2年次在学サクソフォン専攻) 第17回 日本クラシック音楽コンクール 関東地区本選会 木管楽器部門 大学の部 好演賞受賞 ●船橋 登美子 (平成5年大学卒ピアノ専攻) 第6回 弘前桜の園作曲コンクール 一般部門 第4位入賞 ●西方 美紅 (大学4年次在学ピアノ専攻) 第13回 KOBE国際学生音楽コンクール ピアノB部門 奨励賞受賞 ●矢野 彩子 (大学4年次在学フルート専攻) / ●織建 友里 (大学4年次在学フルート専攻) 第13回 KOBE国際学生音楽コンクール 管楽器B部門 奨励賞受賞 ●藤田 明日香 (大学4年次在学ピアノ専攻) 第8回 北関東ピアノコンクール ピアノソロ部門 大学生Sの部 第1位入賞 ●小島 加奈子 (大学2年次在学ピアノ専攻) 第8回 北関東ピアノコンクール ピアノソロ部門 大学生Sの部 第3位入賞、第39回 国際芸術連盟新人オーディション ピアノ部門 合格 ●佐々木 純子 (本大学院修士課程1年次在学ピアノ専攻) 第8回 北関東ピアノコンクール ピアノソロ部門 一般Sの部 第3位入賞 ●高坂 由美子 (平成8年大学卒ピアノ専攻) 第1回 関西ピアノ・オーディション ヴィルトゥオーソ部門 グランプリ受賞 ●沖野 聡子 (大学3年次在学ピアノ専攻) 第5回 北関東ピアノ・オーディション スペシャル部門 入賞、さいたま市長賞、読売新聞社賞受賞、第2回 西関東ピアノ・オーディション スペシャル部門 入賞、カワイ出版賞受賞、平成20年度春期海外音楽大学マスタークラス派遣者助成オーディション 準合格 マスタークラス受講費全額助成 ●横田 真弓 (平成19年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程1年次在学音楽教育専攻) 第5回 北関東ピアノ・オーディション 連弾部門 全音楽譜出版社賞受賞 ●村田 裕子 (平成19年大学卒ピアノ専攻) 第5回 北関東ピアノ・オーディション 連弾部門 全音楽譜出版社賞受賞 ●原口 美奈子 (大学4年次在学ピアノ専攻) 第2回 西関東ピアノ・オーディション スペシャル部門 ドレミ楽譜出版社賞受賞、第1回 近・現代音楽コンクール 審査員賞受賞 ●齋木 睦 (大学2年次在学ピアノ専攻) 第2回 西関東ピアノ・オーディション スペシャル部門 ドレミ楽譜出版社賞受賞、入賞者記念演奏会出演 ●丸山 葉子 (平成18年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程2年次在学) 第1回 横浜国際音楽コンクール ピアノ部門 一般の部 ロシア音楽賞受賞 ●中西 明日香 (平成19年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程1年次在学) 及川音楽事務所 第11回 新人オーディション ピアノ伴奏部門、アンサンブル部門 合格、審査員賞受賞、第1回 日本ピアノ室内楽コンクール 奨励賞受賞、国際芸術認定機構コンサート演奏家資格取得 ●木島 和保 (平成18年大学卒音楽教育学科ピアノ専攻 本特修科在籍) 第1回 日本ピアノ室内楽コンクール 特別賞受賞 ●宇佐美 悠里 (大学3年次在学声楽専攻) 平成19年度 茨城県芸術祭音楽部門 県民コンサート (第1部) 奨励賞受賞 ●野上 華子 (大学4年次在学ピアノ専攻) 第10回 ベトロフピアノコンクール 大学生・一般部門 奨励賞受賞 ●能條 由美 (昭和57年大学卒ピアノ専攻) 第8回 ル プリアン・フランス音楽コンクール 本選 奨励賞受賞 ●浅見 由惟 (大学3年次在学ピアノ専攻) 第8回 ル プリアン・フランス音楽コンクール 本選 奨励賞受賞 ●安徳 弘子 (大学2年次在学ピアノ専攻) 第8回 ル プリアン・フランス音楽コンクール 本選 入選 ●横山 美雪 (平成7年大学卒ピアノ専攻) 第39回 国際芸術連盟新人オーディション ピアノ部門 合格、奨励賞受賞 ●佐藤 亜沙紀 (大学1年次在学ピアノ専攻) 第24回 ピアノ・オーディション D部門 奨励賞受賞 ●廣瀬 史佳 (平成17年大学卒声楽専攻) 第10回 長江杯国際音楽コンクール 声楽部門 一般の部A 入選 ●山口 西 (大学1年次在学ピアノ専攻) チェコ音楽コンクール2007 ピアノ部門 入選 ●佐倉 藍 (平成18年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程2年次在学) 第4回 北本ピアノコンクール 予選 H部門 入選 ●大久保 智 (大学2年次在学ヴァイオリン専攻) 第7回 全日本影明ムジカコンクール 弦楽器部門 大学生・一般Aの部 入選 ●花野井 麻衣 (平成18年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程2年次在学) 第39回 東京国際芸術協会新人演奏会オーディション ピアノ部門 合格 ●福山 恵里香 (本高校2年次在学フルート専攻) 第61回 全日本学生音楽コンクール 東京大会 フルード部門 高校の部 入選 ●宮子 雅子 (附属江古田音楽教室在室 東京女子学園高等学校2年生) 第13回 KOBE国際学生音楽コンクール 管楽器A部門 最優秀賞、兵庫県教育委員会賞受賞 ●犬飼 まお (附属入間音楽教室在室 東星学園中学校2年生) 第9回 ショパン国際ピアノコンクール in ASIA 中学生部門 東京大会 銀賞、全国大会 奨励賞、アジア大会 努力賞受賞 ●横地 ちひろ (附属江古田音楽教室在室 小野学園小学校5年生) 第17回 日本クラシック音楽コンクール 全国大会 打楽器部門 小学の部 第4位入賞、第17回 日本クラシック音楽コンクール ピアノ部門 小学の部 関東地区本選会 優秀賞受賞、全国大会 入選 ●伊藤 あかり (附属江古田音楽教室在室 星美学園小学校5年生) 第2回 西関東ジュニア・ピアノコンクール ピアノソロ部門 C課程 最優秀賞受賞 ●小野寺 香音 (附属江古田音楽教室在室 世田谷区立駒沢小学校2年生) 第8回 北関東ピアノコンクール ピアノソロ部門 小学1、2年生の部 第1位入賞 ●松井 絵莉子 (附属入間音楽教室在室 入間市立藤沢小学校5年生) 第24回 ピアノ・オーディション A部門 奨励賞受賞 ●京増 修史 (附属江古田音楽教室在室 東京三育小学校5年生) 第61回 全日本学生音楽コンクール 東京大会 本選 ピアノ部門 小学校の部 入選 ●新井 悠美 (附属江古田音楽教室 十文字高等学校3年生) 第17回 日本クラシック音楽コンクール 関東地区本選会 ピアノ部門 高校の部 好演賞受賞 ●藤井 千裕 (附属多摩音楽教室在室 寒川町立寒川東中学校1年生) 第7回 全日本影明ムジカコンクール ピアノ部門 中学生の部 入選 ●植草 理子 (附属江古田音楽教室在室 練馬区立大泉第一小学校6年生) 第7回 全日本影明ムジカコンクール ピアノ部門 小学生の部C 入選

平成20年度夏期講習会のお知らせ

平成20年度の武蔵野音楽大学、武蔵野音楽大学附属高等学校の夏期講習会(音楽大学受験講習会、高校音楽科受験講習会、社会人のための夏期研修講座、免許法認定講習)を、下記のとおり実施します。

講座名	会場	講座名	会場
大学受験講習会 ①7/28~7/31 ②8/2~8/5	入間 キャンパスにて 開催	社会人のための夏期研修講座 7/30~8/1	江古田 キャンパスにて 開催
高校音楽科受験講習会 7/28~7/30		免許法認定講習 7/25~8/5	

◎講習会要項は6月上旬発行の予定。要項の請求は、武蔵野音楽学園広報企画室(TEL.03-3992-1125) またはホームページにてお申し込みください(要項は無料、郵送料は学園が負担します)。
※実施日程、開催場所が変更になっている講座があります。詳細は要項でご確認ください。



武蔵野音楽大学楽器博物館だより

ティンパニ

18世紀 ドイツ 直径 右54cm・左51cm

「あのように巨大な鍋に似て、馬の背に乗せて運ばれる太鼓は、いまだかつて見たこともない」——1457年、ハンガリーの王ラディスラウスV世が、フランスのシャルル王の娘マドレーヌを妃として迎えるためにパリに送った使節団を見て、フランスのブノア神父は驚きのあまりこう言った。17歳の若き王は、13歳の王女との結婚を目前にして病に倒れ、不慮の死を遂げてしまったが、使者500人以上、馬700頭とい

う大行列は、ヨーロッパの人々にセンセーションを巻き起こした。中でもとりわけ目を惹いたのが、26台の荷車を曳く馬の背に乗せられた大きな太鼓であった。

ヨーロッパでは、13世紀頃に中東から小型の鍋型太鼓が伝わり、肩や腰に吊るしたり地面に置くなどして使用した。一方オスマン帝国では、軍楽隊が大型の鍋型太鼓を馬や駱駝の背に乗せて演奏したが、これが15世紀に西ヨーロッパに伝わり、ティンパニが誕生した。

ティンパニは、まずドイツ語圏の軍楽隊により、伝統的なオリエントの習慣に従ってトランペットと対で演奏された。その後もヨーロッパ各地の軍楽隊や騎兵隊に普及し、トランペットと共に部隊の花形楽器となり、奏者にも名誉が与えられた。17世紀には、オーケストラへ導入されたのを機に馬から降ろされ、鉄のスタンドが付けられた。19世紀になると、現在の楽器のような調律機構が考案されていった。写真の楽器は四角いネジを工具で回して膜の張力を変化させるもので、18世紀のオーケストラでは最も一般的に演奏されたタイプのティンパニである。

(武蔵野音楽大学楽器博物館所蔵)

●目次●

平成20年度を迎えて	①
福井直敬	
老演出家のオペラ談義	②
栗山昌良	
音楽余話	⑥
細君が彫像に化けて、現場をおさえる	
海外音楽事情	⑦
ケンプ先生の思い出	
ジョン・ダムガード	
音楽の万華鏡	⑧
詩編曲集に描かれた宮廷での奏楽	
卒業生インタビュー	⑨
パソンの焦れて	
小山 清	
MUSASHINO NEWS	⑪
●第14回インターナショナル・サマースクール・イン・トウキョウ	
●着任外国人教授紹介	
●武蔵野音楽大学チェンバーオーケストラ誕生	
●福井直秋奨学金 第4種に柄本さん決定	
●栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）	
●平成20年度 夏期講習会のお知らせ	
●平成20年度4月～7月公開講座・演奏会のお知らせ	
●平成20年度 武蔵野音楽大学・武蔵野音楽大学附属高等学校 学校説明会	

武蔵野音楽大学大学院

博士前期課程・博士後期課程

武蔵野音楽大学

武蔵野音楽大学附属高等学校

武蔵野音楽大学第一幼稚園

武蔵野音楽大学第二幼稚園

武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園

附属音楽教室 江古田・入間・多摩

◎発行◎

学校法人 武蔵野音楽学園

江古田キャンパス ●〒176-8521 東京都練馬区羽沢1丁目13-1
TEL.03-3992-1121(代表)

入間キャンパス ●〒358-8521 埼玉県入間市中神728
TEL.04-2932-2111(代表)

パルナソス多摩 ●〒206-0033 東京都多摩市落合5-7-1
TEL.042-389-0711(代表)

<http://www.musashino-music.ac.jp/>

2008年4月1日発行 通巻第85号